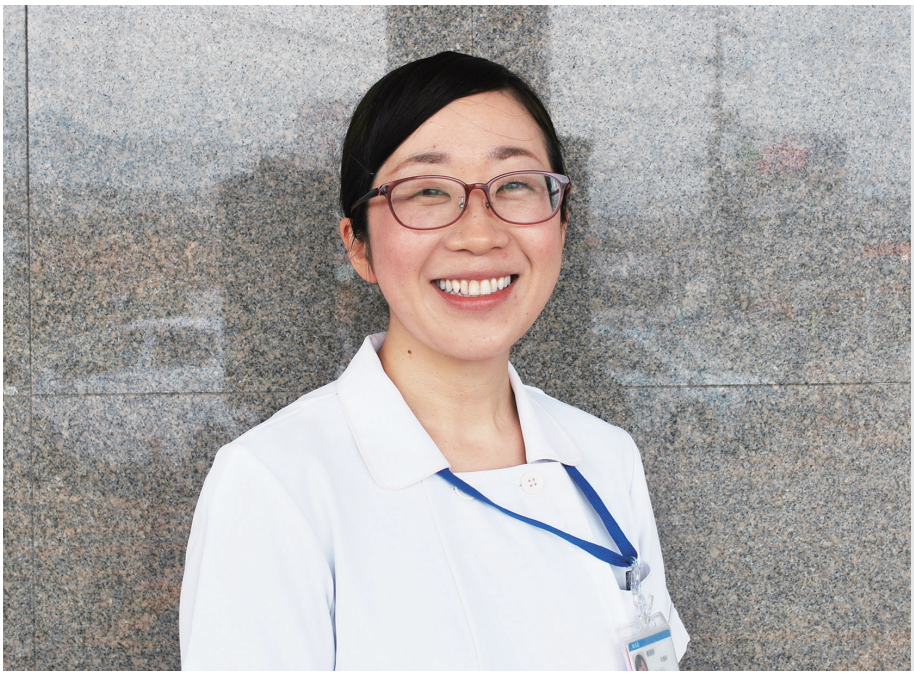

“その人らしさ”を普通に認める社会で学んだ医療従事者の姿勢

飛鷹 佳子さん　新居浜市十全総合病院 看護師
Yoshiko Hidaka

南米エクアドルのマカス。祭になると老若男女が路上で踊るのびのびとした街。ストレスフリーともいえる社会で、多様な人生観や価値観を受け入れる医療従事者としての姿勢を学んだ。

エクアドルで経験した多様な人生観。助け合う社会に感じた医療姿勢

病院という狭い世界にいると、つい自分の常識にとらわれた医療を押し付けてしまうことになりかねない。協力隊での経験は、看護師としての私の視野を広げてくれた。

赴任先はアンデス山脈とアマゾン川源流域の間に位置する地方都市。年間を通して気温は20～25℃と過ごしやすく、治安も良かった。住居はホームステイで、必要なものは何でも手に入った。Wi-Fiが整備されていたため、日本から遠く離れている感じはなかった。

エクアドルはノンストレス社会。寿命も長く、みんな気ままに生きている。時間は守れないし、約束した事もいつのまにか消えてしまうが、まじめで素直な人が多く、とても親切だ。

配属先はドクター1人の小さな診療所。ベッドとドクターの机のほか、これといった医療機器もない。

看護師はドクターに指示されたことだけをこなし、患者に寄り添うといった意識はない。骨折の処置後、痛みで動けない患者がいても無関心。そこで役で立ったのが、日本の基本的なリハビリ技術だった。

ベッドの上で患者さんを動かすこと、ベッドから車いすへ患者さんを移すことなど、日本の医療現場では基本的な技術だが「このやり方はいい」とまわりが感心し、リハビリ担当者を集めて講義させてもらったこともあった。

ある日、民族語しか話せないおばあちゃんが訪れたのだが、誰も言葉がわからない。ところが私にはわかったのだ。言葉が話せない患者さん、言葉が

パソコンでカルテを確認

マラソンイベントに救護班として参加（左）

中高生向けメディカルスクールで医療の基本を説明

聞き取りにくい患者さんから体の動きや表情、声色などから症状を読み取っていくことは、日本の現場で常に心掛けていたからだ。

重症の赤ちゃんが運ばれてきたことがあったが、ドクターはこれといった手を打ったようにも見えず、疑問を感じたこともあった。後でその患者の家族は現金収入がないことを知った。日本の概念は通用せず、社会背景や生活事情とも向き合う必要を痛感させられた瞬間であった。

当初は「日本から何をしに来たの?」という目でみられたが、自分が実践することで、日本の看護師の献身性や技術が少しずつ現場の同僚たちから認められ、帰国の際は3回も送別会を開いてくれた。

思い返すと、日本の医療は進んでいるからいい、という意識はおごりだったと感じる。

医療技術が進んでいるから患者のニーズに応えられるとは限らない。患者の生活や社会を知らなければ、的確な医療は施されないということだ。

街では車いすの人、障害を持った人を見かけ、健常者との壁を感じなかった。日本と比較して人と人の距離が近く、他人をごく自然に受け入れ、助け合っているように感じた。

現職参加制度で職場に復帰。医療従事者として後輩を指導

勤務する新居浜十全総合病院は、休職などの形で所属先に身分を残したままJICA海外協力隊に参加できる「現職参加制度」を取り入れたため、エクアドルからの帰国後は元の職場に復帰した。

職場では一般病棟の看護師としてさまざまな患者に向き合い、小さな変化にも迅速に対応し、原因を見極める。患者のペースを尊重し、食事などの介助も根気強く行う。

医療従事者は患者さんやご家族に寄り添い、ベストな治療方法が選択できるよう技術や知識を習得していかなければならない。その前提として世の中にはいろいろな価値観、人生観を持った人たちがいて、それぞれにその人らしさや幸福感があることをエクアドルの人たちに教えられた。

飛鷹 佳子さん プロフィール

岡山大学卒業後、同大学病院を経て、十全総合病院に看護師として勤務。同病院に現職参加制度を導入してもらい青年海外協力隊に参加。帰国後、一般病棟で看護職を務める一方、看護学生への講義で協力隊の経験を語る。

看護学校では、国際看護の授業で講師として協力隊での体験を話す。

医療従事者こそ、いろいろな経験を積み、さまざまな患者さんと出会って視野を広げ、独創性や臨機応変な対応を鍛える必要があるのではと痛感した。そういう意味で協力隊は視野を広げる絶好のチャンスだ。海外では言葉がわからないから気が進まないと敬遠されがちだが、看護の現場では言語的なコミュニケーションが難しい患者さんもたくさんいる。海外の現場に赴いたことで、言語を超え、寛容な姿勢で心通わすことが鍛えられた。

西日本豪雨では災害支援ナースとして活動

飛鷹さんへのエール!

新居浜十全総合病院
看護師長
近藤 愛 さん

医療現場を担う若い力に新しい風

すごく患者さんのことを思って看護し、観察力がずば抜けています。たとえば食事の介助では、なかなか食べてくれない患者さんもいますが「この方は時間をかければ食べられます」とゆっくりと対応しています。その姿を新人看護師が見て「飛鷹さんのようになりたい」と話すほどです。また、看護教育では協力隊での体験談を学生に話し、医療現場を担う若い力に新しい風を届けてくれています。